
金魚鉢に咲いた、咲いた。

本木日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚鉢に咲いた、咲いた。

【Nコード】

N7324M

【作者名】

本木曰

【あらすじ】

家族愛をテーマに書いてみました。

幼いころに恵まれない家庭環境に育った私。

その環境への反発なのか、平凡な家庭、理想的な家族を追い求める。しかし、息子の不可解な行動、夫との溝、近所付き合い、そして忌まわしい過去。これらによって少しずつ安定の基盤が崩れていき、ある時私は自分の犯した大きな過ちに気づく。

一生懸命に生きるあまり、大事なものがその手から遠のいていく。孤独の中で私が見つけた答えは？

笑いと愛情を軽いテンポ、かつミステリーを基盤にしなが、そして
てっしだけ文学的なものを織り交ぜながら
エンターテイメントに仕上げています。
きつとあなたの中に何かを問いかけることが信じています。

1章

5月11日

飯盛市で買い物を済ませて国道に出ると次々と現れる大きな電器店や

コンビニやガソリンスタンドを通り過ぎて私の暮らす町まで車を走らせます。

このまま真つすぐ10分ほど走れば、私の暮らす町に行きつく。そこはほんと

に小さな町。すぐ隣は県庁所在地である飯盛市なのに

隣接するこの町は田んぼだらけ。田んぼの中に民家がぽつんぽつんと点在する町並み。

そう言ってしまうばただの田舎じゃないと思われてもしかたないのですが、見渡す限

り緑一面の町の風景の中、街の真ん中を飯盛市から続く国道が突っ切っていて、

その上を1日中朝から晩まで一般車や大型トラックが縦断しているために静かな

どころか賑やかな感じがして、その国道沿いに立ち並んだスーパーやパチンコ店

やらの前を歩いてみると少し田舎気分を忘れること出来る。

ここに住む町民達は自分たちも隣の飯盛市の一員だという意識が強く自分たちを田舎者として観られることに我慢がならないそうです。

昔からこの子供たちは週末になると飯盛市まで自転車で遊びに

いくのが習慣で、

そのせいか大人になっても自分たちの町以上に飯盛市に愛着があるそう、それなら

引越せばいいじゃないと言いたくもなるのですが、よそ者の私には解らないこともあるでしょう。ちなみにご近所さんから伺った話なのですが、飯盛市での行動は中学生にならないと認められないらしく、小学生の段階で遊びにいったことがばれたり見つかったりしたら、怖い先輩に呼び出されてヤキを入れられるそうです。

そんな独特のルールからしても田舎者だなという印象は拭えませんが。

簡単にいえば郊外ってことなのでしょうが飯盛市がそんなに大きな街ではないためにここを郊外と呼ぶには少し恥ずかしい。ただここは本当に住みやすいところ。私の住む家は国道から西にそれる一本道を丘に向かって登っていくと見えてきます。最近建てられたばかりの新興住宅街。その中の一つが我が家です。新築の匂いが充満する、汚れひとつない夢の城。主人の職場も飯盛市でそんなに不便はないし、何より子供にとって最高の環境。空気も水も汚れていなくて、水道水もそのまま飲めます。たまにスーパーで「なんかの天然水」みたいなペットボトルを買う人を見かけるのですが不思議に思っています。ここは自然と人間が共存している土地。丘の上に創られたこの空間には、それをアピールするように太陽光発電を売りにした16棟の新築が立ち並び、大がかりな宣伝の効果もあって（わたしもそれに釣られた一人なのですが）この家を手に入れようと予想以上の希望者が殺到。そのため町民体育館を貸し切った私たちは晴れて3月から一戸建てデビューとなったのです。

主人はそんな焦らなくてもゆっくり探せばいいじゃないかと言ったのですが、私はどうしてもこの一戸建てを手に入れたかった。この家は幸せの象徴。私の未来。安定こそが私の喜び。それをはやく

この手で実感したかった。

だから家のグレードなんてそんなにこだわらない。隣の美護さんのお宅は我が家よりも数段格上の造りで、当初は玄間の前に立っては我が家と自分の家を見比べて「おたく、シンプルできれいな感じで解り易い嫌味なんかいわれたりしたのですが、そんなことは気にしません。主人なんか「やっぱ、BMWの隣には止めづらいよ」と車庫が隣合わせなのを嘆いて本気で外車に乗り換えようとしていたものですから必死で止めたこともありました。私は見栄を張るためにここに引っ越したわけではないのです。ただただふつ々の暮らしが欲しかっただけなのです。

そして私たち家族の未来の象徴、5歳の息子を紹介しましょう。数哉。愛しい数哉。数学教師である夫がつけた変な名前ですが、おまけに数哉に勉強を教えることもなく、それどころか、キャッチボールなんか毎日のようにしてどうゆうつもりか分かりませんが、とにかくかわいいのは間違いないこと。そしてなによりとっても優しいのです。

お隣の美護さん家の一人息子、領君を弟のように可愛がる姿は天使そのもの。この間なんか二人でテレビゲームをやっていたのですが、いつも負けてあげるのです。そして必ず「すごいね、領くんまた勝ったね」って。そういつてあげるのです。ほんとに優しい子。ついこの間は窓ガラスにぶつかって動けなくなったスズメを持って帰ってきて

家で飼いたいと言うものですから「ダメよ、ばい菌があったりしたらあぶないでしょ」となだめたのですがどうしても飼うと言ったきかないので強く叱ったところ、泣きながら飛び出していったのです。夕方になっても帰ってこないの心配していると、お隣のご主人が「うちの倉庫で眠っているよ」と教えてくれました。急いで見に行くとう倉庫の

端っこで両足をたたんで震えているスズメを宝物のように両手で包んですやすやすと眠っているではありませんか。

こんな子がどんな間違いを犯すというのでしょうか。ほんとにいい子でよかったと心から思っています。ただ、一つ気がかりなのが、優しすぎて気持ちが入りすぎてしまうところなんです。先週、国道沿いの大型量販店に買い物にいったときの話。

どうしても野球のグローブが欲しいというものですから、数人と二人で買いに行ったのです。まさに飛び跳ねるボールのごとくスポーツコーナーに消えていった数人はしばらくすると両手に二つのグローブを抱えて私のところに駆け寄ってきたのです。最初は主人の分かなと思ったのですが、それにしても小さすぎます。二つとも子供サイズの同じ大きさ。

「パパのはあるでしょ？一つでいいのよ」。そういうとモジモジしながら小さな声で言いました。

「おとうとのも」。おとうと？領君のこと？

ダメダメ！そんなことしたらなんて言われるか！

あら、うちには子供にグローブを買ってやれる余裕もないって思いで？こういうっちゃなんですけど、お宅よりは稼いでいるつもりなんですけど（笑）

なんて言われるに違いはないわ。絶対にダメ。

「だめよ。よその子のは買えないの。ちゃんとお父さんとお母さんがいるんだから」

そういうとクシャツと顔を崩して驚くことを口にしたのです。

「どうしてヨソなの？おとうとなのに！」

それから一向に泣き止まないのですそのまま帰ってきたのです。それにしてもそこまで思い込んでしまうなんて。

少し気をつけて見守らないと。

それにしても主人ときたら…。

「なんだ、二つ買ってくればよかったじゃないか」ですって。あなたのおかげでこっちがどれだけ苦労してると

思っているのよ。少しは近所付き合いつてものを勉強してほしいわ。

6月1日

今日の午後、ご近所さんから心配な話を伺いました。今日の午後、奥さんは回覧板を届けに我が家を訪ねたらしいのですが私はその時間帯は郵便局に行っていたものですから数哉にお留守番を頼んで一人で出かけていました。奥さんは玄関の呼び鈴を押したらしいのですが数哉には誰が来ても出ちゃダメだと釘を刺しておきましたのできつと私の言うことを聞いて大人しくしていたのでしょうか。

奥さんの家は我が家の裏手にあるので我が家の周りをぐるりと沿うように歩いて帰ったはずです。そこで垣根越しにお庭で遊んでいる数哉の声を聞いたそうなのです。奥さんは数哉に声をかけようかと思い、垣根に近づいた時になんとなく数哉の会話が耳に入ってきたその内容に耳を潜めたらしいのですが、その会話のやり取りが首を傾げるような中身だったそうなので母親の私に話しておいたほうがいいと、わざわざ訪ねてきてくれました。

私にもその内容は理解しがたい話でとりあえずお礼だけ言って帰ってもらったのですが、どういうことなのでしょう。奥さんの話をそのまま再現すると、数哉の話した言葉はこうだったらしいです。

『そうなんだ、けがしたんだ。どこで？』

『ふーん。ちがいつぱいでたの？』

『だいじょうぶだよ。こんどはおにいちちゃんがちゃんとそばにいるからね』

と、これだけだったらしいのですが、私はその話を聞いた後、怪我をしたのが領君だと思い、急いでお隣を訪ねたましたが領君はかすり傷一つ負っていないのです。じゃあ、この間から数哉が　おと　うと　と言っている子はだれのこと？

私はてっきり領君のことだと思っていたのに。その後、ご近所さんに怪我をした子がいないか聞いて回ったのですがそれらしい子はいませんでした。だいたい、この界限でそんな子がいればすぐにで

も話は伝わってきます。

おばさま方の伝達能力はインターネットなんかより数倍、能力が優れているのです。ただし、途中で段々と内容が大げさになるという欠点がありますが・・・。

私は心配になってお外から帰ってきた数哉に尋ねることにしました。この間の事といい、少し数哉の様子が変です。

テーブルの上に置いたおやつに夢中になっている数哉を居間に呼んでソファーに座らると、

「ねえかずくん、今日お庭で誰と話していたの？お友達？」となるだけ警戒させないように優しく尋ねました。

がしかし、さっきまでニコニコ顔だったのが一変、一瞬にして緊張感に包まれていくのが見てとれます。

おやつは取引き材料だと思ったのでしょうか。テーブルの上に戻して手をつけません。

「怒らないからいつてごらん。だあれ？ご近所の子？」

きつと、私の言いつけを破り、友だちとはいえ、勝手に家に招き入れたことを怒られると思っているのでしょうか。

ちらつと私を見上げると「ほんとにおこらない？」と子犬が鳴くような声で聞いてきます。

私はあまりの可愛さにぎゅっと抱きしめたい衝動にかられましたが、ぐつと抑えて「怒らないから言ってみなさい」

と母親らしく数哉に言いました。

「かずくん、怪我したってだれのこと？」

「……」黙ったまま、俯いています。

「おとうとって、だれのこと？」

それでもソファの上でモジモジしていた数哉でしたが、ようやく観念したのか、ぼそつと零したのです。

「… たつや」

タツヤ？このご近所にはそんな名前の子はいません。どこか他所から遊びに来ている子なのでしょうか？確かに丘の下に住む子供た

ちがよくここの前の道を自転車で通ります。この丘の奥には綺麗な川があつてそこで魚釣りや水遊びをしているそうなのです。その子達と仲良くなつたのでしょうか。

「こんど、おうちに連れてきなさい。おかあさんがいるときに」

「うん。いいよ」

そう返事はしたものの、やはり何か隠している様子。目を合わそうとしないのです。

「どうしたの？おかあさんにあわせたくないの？」

そうゆくと、はじめて私の目を見上げた数哉の目の中に反抗的な色が含まれていることに私はたじろきました。

「おかあさんがいたくないんでしょ。たつやがいったもん」

そうゆくと数哉は外に飛び出して行きました。

どうゆうこと？一度も会つたことのない子にどうして会いたくないのよ？それとも私の知っている子？

私はショックを受けて居間にあるソファに座りこみました。ソファからは狭いながらも綺麗に整えたお庭が見えます。

あそこで数哉は誰と話していたのでしょうか？

実は、私の受けたショックには今のやりとり以外の事も含まれています。

怖くて数哉には聞けなかったことが一つあつたのです。

今回の一件を伝えてくれたご近所さんが「それと…」と最後に話しづらそうに教えてくれたこと。

「私が聞こえなかったただけかもしれないですよ、きっとそうですわ」と、おっしゃってくれたのですが、それで

も笑つて済ますことの出来ない話。

彼女は最後にこう付け加えたのです。

「それと、今した数哉君の会話のやりとりなんですが…。相手の子の声が全く聞こえなかったんですよ」

ドン、ドン！！

玄関を叩く音がします。

「奥さん！いるの？いるんでしょ？」

お隣さんです。

「あなた、さつき領が怪我してないかって尋ねたけど、うちの領におたくの坊ちゃんがかしたのかしら？それならそうとはつきりおっしゃってよ。奥さん！」

悩み事は一つじゃないのです。

安定とは程遠い生活が続きます。

8月10日

今日は電車と新幹線を乗り継いでおばあちゃんの家に行ってきました。数歳と主人も一緒です。5時間近く乗り物に揺られているとさすがに疲れました。

主人はついた早々、あいさつもそこそこに、縁側に横たわると顔の上にタオルを載せたと思ったらすぐにいびきをかき始めました。

子供はさすがに元気なものでひいばあちゃんの絵を描くと言って画用紙とにらめっこです。数歳はあれ以来変わった様子は見せませんでした。やはり私が過剰に反応しただけなのでしょう、そう思うようにしました。主人に相談したところ「子供はそうやってひとり遊びするもんなんだよ。君だって経験あるだろ？」そういつて気にもかけてませんでした。最初はなんて能天気な人！とヒステリーを起しかけたのですが、落ち着いて私の子供のころを思い返せば確かに彼の言うとおり、私だってよくひとり遊びをしていたものです。この田舎に帰ってきたせいか、その頃の思い出が蘇ってきます。

そうですね、いい機会ですからこの辺りで私の半生を語っておきましょう。

私には物覚えのついた頃から両親はそばにはいませんでした。母親は私を生んですぐに男を作って出て行きました。私が母について

知っている情報はそれだけ。それ以外の事はおばあちゃんに何を聞いても「知らんでええ」の一点張り。その度に悲しい思いをしたものですが私は幼いなりに事情は察していました。原因は父親にあったのです。私の父、喜一はトレジャーハンターといって世界中を飛び回って、家に帰ってくることはほとんどといってもいいほどに皆無でした。トレジャーハンターといっても、自分でそういつているだけでたまに持ち帰ってくるものと言え、石ころや得体のしれない木彫りの人形などでした。当然、そんなものはお金になるはずもなく、当然のように、借金をたく

さん作り、拳句のはあてにそれらが返し切れないほどに膨らんだとみると海外にそそくさと逃亡すると言ったあきれ返る生き様です。どうやったらそんな父親を愛せというのでしょうか。

私は中学校に上がるころには父親を憎んで、高校に上がる頃には父親はいないものだと思い込んでいました。そして私が高校を卒業するころに聞いたこともない国で父はダイナマイトの操作ミスで死亡しました。遺骨は日本に帰ってくることもなく今でもどこかの土の中に埋もれたままです。

そんなどうしようもない父親でしたが、幼少時代の私には世界中を旅する父親がかっこよく誇り思われ、友達によく自慢していたものです。

なかなか帰ってこない父を縁側の端っこに作った手製の勉強机の前に座っては、窓の外に見える玄関を見つめ、今か今かと待ち構えることが日課となっていたのです。そしてたまに帰ってきたときには近所にある向日葵畑に連れて行かれ、二人でかくれんぼをしたことを覚えています。

向日葵の中で父親はよく笑っていました。黄色い光の中で父の顔がきらきらと輝いていたことを今でも忘れることが出来ません。

今思えばあの頃は借金に追われ、苦しい立場にいたはずです。どうしてあんなに笑うことが出来たのでしょうか。父には笑顔の印象しかないほどにいつも楽しそうでした。しかし大人になって振り返る

とそんな父親には無責任という感情しかおきません。ダメ親父の道楽の尻拭いをしてきたのはおばあちゃんなのです。女手一つで愚痴一つ溢さずに借金にまみれたこの家を切り盛りしてきたのです。今あらためて思えばそんなおばあちゃんには

感謝の言葉しかないのですが、あの頃の私にも降りかかった貧乏という悪魔は今でも恐怖そのものです。二度と体験したくはないものです。

さて、私の過去はこのくらいにしておきましょう。主人もようやく起きてきました。昨日おばあちゃんが買ってきたスイカを切ってみんなに配ります。

数哉の絵も完成したようです。居間に座ってその絵をみんなで見ました。

クレヨンで描いたその絵は黄色一色でした。向日葵でしょうか？たしかに居間からは広い畑に咲いた背の高い向日葵がよく見えます。それを見ながら描いたのでしょうか。そしてそのたくさんの花畑に囲まれておばあちゃんが笑っています。数哉の描くおばあちゃんは実年齢よりずいぶん若いです。

もうそんな気遣いが出来るのでしょうか？やっぱり頭のいい子。ただひとつ、不思議なのがその隣にもう一人、おばあちゃんとかつくように立っている男性がいます。主人でしょうか？それなら私も描いてほしかった。少し悲しくなっていました。スイカにかぶりつきながら扇風機の前でだらけていた主人が体を乗り出して覗き込んできました。そして口をもごもごさせながら

「うん？この人は誰よ、数哉？」

と聞いてきました。土間でスイカの種をぶぶつと吐き出して遊んでいた数哉がくるつと振り返ると大きな声で言いました。

「おじいちゃんだよ！」

それを聞いた私たちはびっくりして顔を見合わせました。そして主人がそれを代弁しました。

「なんだ数哉、おじいちゃんの顔を知っているのか？」

「今見たもん」

それを聞いてまた主人と顔を見合わせました。

「アルバムかなんか見せたか？」

「いいえ、どこにあるかも知りません。」

「ねーええ、おばあちゃん。数歳に父の写真見せたのー？」

最近耳の遠くなつたおばあちゃんに少し大きめの声で尋ねましたが、聞こえているのか聞こえてないのか、縁側に座りこちらに丸まつた背を向け

たまま、お庭の向日葵をじつと眺めていたおばあちゃんがぼそつと言いました。

「今年も帰ってきたかえ。そうかあ、そうか」

それを聞いて三度、主人と目を合わせましたが、私は動揺していませんでした。

ああ、ついに来たか、そう思っていたのです。そうなんです。そろそろ来てもおかしくないのです。怖くて考えないようにしてましたが

その年齢まで気丈に振舞っているのが不思議なくらい。覚悟をきめない。私がすっかりしないと。

でも心配しないで。痴呆が表れても、寝たきりになっても最後まで面倒みるからね。そろそろ恩返しさせてね、

おばあちゃん。

その晩、蚊帳の中でおばあちゃんと布団を隣り合わせにして一緒に寝ました。そして、前々から主人と話し合っていたことを口にしたのです。

「ねえ、おばあちゃん。もう寝た？」

「いいや」

「そろそろさ、うちに来ない？一緒に住もうよ。正志さんもぜひつて言ってくれてるのよ」

言い遅れましたが、正志とは主人のことです。実は主人と結婚すると決めた時におばあちゃんと一緒に住むことは了承済みです。だから

我が家もバリアフリー設計になっていていつでもおばあちゃんを迎え入れる準備は出来ているのです。

しばらく黙ったまま天井を見つめていたおばあちゃんの顔はまたしわが増えたみたいです。

ゆっくり目を閉じたおばあちゃんは喉の奥からしぼりだすようにぼそつと言ったのです。

「そうやね、そうしようかねえ」

その答えは私の予想に反するものでした。今までのおばあちゃんなら「一人で大丈夫じゃ、誰の世話にもならん。孫に面倒みてもらうくらいなら

死んだほうがええ」

きつとそう言っただけです。実際に今まではそうだったのです。だから今日も長い話になるだろうと、がんばって説得しないと、と意気込んでいたのに。

でも、そんなおばあちゃんでもやはり年齢には勝てないのでしょう。

自分が弱ってきているのを感じているのでしょう。

「そうよかった」

なんとかそう答えた私は顔を背けてしまいました。うれしいはずなのに、なぜか寂しいのです。大事なものが一つ一つ、私にお別れを言ってくる。そのことに大人になった今でも耐えられそうにありません。

お願い。まだ何も恩返ししてないの。もう少しそばにいてね、おばあちゃん。

8月15日

今朝、朝食を作っていた時のことです。勝手口のほうからガサガ

サとなにかが蠢くような音がしたので、私は「ああ、またか」と嘆いてはほうきを持って勝手口から飛び出しました。

そこでは黒猫と三毛猫が仲良く生ゴミの入ったごみ袋を漁っていたのです。

「こらー！」と大声で叫び、ほうきをバンバンと地面に打ちつける
と彼らはすばやく退散しました。まったく、ため息が出ます。裏庭
はゴミが散乱して目も当てられない状況です。酷い匂いが立ち込
める中、時間をかけて一つ一つゴミを摘みあげているうちに、段々と
怒りがこみ上げてきました。

この生ゴミ、我が家のモノならばまだ我慢が出来るものの、実は
お隣の美護さん宅のモノなんです。

我が家の生ゴミは裏庭の倉庫に入れていますので、猫が漁ること
はないのですが一方、美護さん宅のゴミはポリバケツに放り込んで
ふたもせずそのまま放置されていますので猫にとっては宝の山。
猫たちが美護さん宅の領域内で好き勝手やってくれるなら私も何も
言いませんが、猫たちはわざわざ我が家の裏庭までゴミを持ち込ん
ではゆつくりとディナーを楽しむものですから、いつも後片付けを
する私にしてみれば迷惑そのものでしかありません。

もう限界です。なんとかしなくては。

二階で寝ていた主人が私の叫び声で目を覚ましたらしく、何事か
と起きてきました。

「あなた、なんとかしてよ」

今までに何度も八つ当たりの犠牲になってきた主人にしてみれば、
またその話かといった呆れ顔。

「しょうがないじゃないか、隣同士仲良くするには少々の我慢は必
要だろ。君だつてご近所付き合いがどうのこうのっていつもいつて
るじゃないか」

そういつてまともに相談に乗ろうとしません。そうなんです、
いつもこの人は争いを避けてなんとか穏便に済まそうとする。最初
はそういう彼の性格を

優しさを受け止めていたのですが、今では弱さにしか見えません。
「よし！俺がひとこといつてやる！」そのぐらいの事が言えないの
でしょうか。

こうなったら私が行くしかありません。勢いよく乗り込んでガツ
ンと云ってやりますわ！

ピンポン。

「はあい。だれ？あら奥さん。どうしたの、こんな朝早くから」

「どうも、おはようございます。すいません、お忙しい時に」

「いいわよ。なにか？」

「実はですね、その、申し上げにくいんですが……」

「早くしてよ。ハーブティーが覚めちゃうじゃない」

「す、すいません、すぐ済みますので。実はですね、お宅の裏に置
いてあるゴミですけど、あれを猫が漁っているをご存知ないか
と……」

「知ってるわよ」

えっ？

「そんなことをこんな朝早くから云いに来たわけ？お宅もヒマね。
うちは忙しいの、それじゃ」

「ちよ、ちよっと、それだけじゃないんです、そのゴミを、猫が、
我が家の裏庭に持ち込んでですね、それで……」

「あら、ネコの面倒まで私が見ないといけないわけ？一日中ゴミバ
ケツの前で見張っているって奥さんは云いたいよね？」

「ち、違います、奥さんを責めているわけではないんですよ、ただ
フター一つするだけでも猫はよって来ない……」

「あなた、ネコちゃんに好かれてるんじゃないの？」

「はあ？」

「きつとそうよ、そんな顔してるわよ、ネコちゃんが寄ってきそう
な顔」

……

「大丈夫よ。ネコちゃんが集まる家はいいことがあるって風水の先

生がおつしゃっていたわ。よかつたじゃない、それじゃ」
ボタン！

8月20日

今日は海水浴にやってきました。最近夜回りで寝不足の主人を引っ張り出すのは苦勞しましたが、数哉は大はしゃぎ。車で1時間かけてやってきました。

途中、八百屋さんで小ぶりのスイカを買いました。みんなでスイカ割りしようと思います。

さすがにお盆を過ぎると海中にはクラゲが発生するために人はまばら。向こうに家族連れらしき人たちがいますが、私たちが陣取ったところからは随分と離れています。

周りは誰もいません。ビニールシートを敷いて荷物を置くと主人と数哉はさっそく海のほうへと駆け出しました。

私はオイルを塗って日光浴を楽しみました。主人と数哉の笑い声が聞こえます。夏休みに入って生徒が夜の街に繰り出すために毎日のように夜回りに出かけて

生徒指導を行っていますので帰りも遅く疲れているはずですが、こうやって数哉といっしょにいてくれるところを見ると、子供を人一倍愛していることがよくわかります。

きつと私はそうゆうところを結婚相手として選んだのでしょう。二度と父のような人間に振り回されないようにと。

小学生のころ、一度だけ海に行ったことがあります。しかしそれは私の家族ではありません。同じクラスの子に誘われて、その子の家族と一緒に出かけたのです。

その日、迎えに来た車に乗り込んですぐに来るんじゃないかと後悔の気持ちに襲われました。クラスメイトの家族はみんな仲良しで車の中は笑い声で溢れて

いました。私にも退屈しないようにとよく話しかけてくれたのです。しかし、その気遣いが私には居心地の悪いものでしかなかった

のです。これは偽物の愛情だ、

この優しさは家族の愛情を知らない私に対する同情みたいなものだと感じていました。彼らに悪気はないことは解っていましたが、道中、私は何度も吐き気に

襲われ、必死で我慢していたのです。

海についても私は泳ぐのもそこに浜辺に座りこんではずうつと向こうに見える歪んだ水平線を眺めていました。太陽が冷たかったのを今でも覚えています。

砂浜にずっと埋もれていきそうになる感覚を体中に感じながら。

「ね、アイス買ってきていい？」

クラスメイトの子が母親にお金をせびるのをわたしは横で見えていました。

「もう。一つだけよ」とおばさんが財布から取り出した１００円玉をつかむとうれしそうに露店のほうに駆けだした彼女を微笑みながら見送っていたおばさんは、

しばらくして私の存在に気が付いたのでしよう、「あなたも買つてきなさい」と１００円玉を手渡そうとしたのですが、私はがんとしてそれを受け取ることは

しませんでした。

何に対してわたしは首を振ったのでしょうか。幸せそうな家族に對して？それとも私自身？他人の家族の中で小さくなっているわたしに？

私に気兼ねすることもなく母親にお金をせびったクラスメイトに嫉妬して？貧乏のあまり、その１００円を欲しがった惨めな自分に？

どっちにしてもあの頃の私はもうここにはいません。私には家族がいます。誰からも同情されることなく、誰から見ても普通の家族。向こうに見える家族となんら

変わりはないのです。なにも心配することはありません。

向こうにいる家族もこちらを見えています。どっちが幸せそうか比べているのでしょうか。向こうにも小さなお子さんがいるみたい。家族構成は我が家と一緒に。

うちと一緒にね、そんなことを言っているのでしょうか。手でも振りたい気分になってきました。「どうそっちは幸せ？うまくいっての？」

向こうの家族も手を振っています。うん、幸せよ！って。「おいおい！」大きな声で叫んで……

えっ、うそ？

私の心の声が聞こえたの？

違います。そうではありませんでした。なんてことでしょう、美護さん一家です…。

よりによってこんなところで…。

「あら、いらしゃっていたのね。誘ってくればよかったじゃない」

「こんにちは。いや、その、ご迷惑かと思ひまして」

隣には美護さんのご主人も笑顔で声をかけてきました。

「どうも、お久しぶりです、奥さん。今日もお綺麗ですね。ワンピースの水着がお似合いだ。なあ？」

「そうね。『マルシヨ』で売ってそうな水着ね」

奥さんの発言に、私は顔が真っ赤になってしまいました。そんなんです、奥さんの云う通り、マルシヨのバーゲンセール、980円で買った物なのです。

「奥さんのビキニも素敵ですね。とってもお似合い」

真っ赤なウソです。どうしてこんな田舎でこんな派手な水着が着れるのでしょうか。太陽の光を反射する金色の生地に薔薇の刺繍。近くににいるのが恥ずかしい。

美護さんのご主人が私の背中の方に向かってぺこぺこ頭を下げています。振り向くと夫もぺこぺこ頭を下げています。領君はすでに数哉とじゃれ

合っています。

「スイカ割りですか。昔はよくやりましたね」

美護さんのご主人は昔を懐かしんで云っているみたいですが奥さんは全く関心がなさそう。

「昔は黄色のスイカをよく見かけたけど今は殆どみないなあ」

私はご主人に会話を合わせます。

「そういえばそうですね。あれって、品種改良かなにか、なんですか？」

「どうなんですかね。人気がなかったから作るのやめたんですかね？」

「きつとそうですね。私あれ、気持ち悪くて食べれなかったですもの」

「あら、私は好きだったわよ。黄色いやつ」

奥さんの一言に汗がにじみます。

「お金がかかりすぎたんじゃないでしょうか？良いものつて資金がいるものでしょう？奥さんのそのサングラス、お高いものじゃありませんの？」

見た感じ、特注品でしょう？」

「あら、よくわかったわね。あなたも『グベール』ご用達なの？」

あの一流ブランドにもこんな悪趣味なサングラスが置いてあるのでしょうか？顔の半分以上を覆ったデッかいレンズの横にチヨウチヨの羽が広がっています。

数あるサングラスの中でわざわざこれを選ぶことが不思議でなりません。

「いいえ、我が家の財力ではとてもとても。お店の前に行っても足が震えて入れませんの」

あはは、と笑い会うご主人と私。

「お店に入ったこともないのによくわかったわね、特注品だって。当てずっぽうだったのね」

誰か助けてください。

そんな時、後ろから主人の声が聞こえてきました。

「おい！このスイカ黄色だぞ！気持ち悪くてくえねーな」
サングラス越しでしたが、奥さんの眼光が太陽にも負けないほどに光っているのを、私は確認したのです。

9月22日

学校も始まり夫も学園祭や期間テストの準備で忙しいみたいです。昨夜も帰宅したのは真夜中。起きてなくていいと言うのでベッドに入っていたのですが彼が玄関のドアを開けたのは3時過ぎ。そんな遅くまで掛かるものなんでしょうか。まさか、女でも出来たのでしょうかかとも思ったのですが、いや、彼には無理でしょう。そんな度胸はありません。まじめ一本の人なんです、昔から。こと女性関係に関しては。曲がったことが出来ない人なのです。不器用なくらいに誠実なんです。だから私は彼と結婚できたのです。

9月24日

最近、数哉はお外でよく遊んでいます。お隣の領君と一緒にの時もあれば、ひとり遊びをしている時もあります。
この間の事を気にしているのでしょうか、一人にいるときに私が声を掛けると、いたずらが見つかった時のような顔をして振り向くのです。そしてそそくさと逃げるようにおうちに帰っていく。
何をそんなに隠しているのでしょうか。
今日はこっそり近づいて調べてみようと思います。
息子の事が心配なんです。

かようび はれ

きょうはおそとでりょうくとあそびました。
りょうくんがかえってもさびしくありません。
ひとりのときはたつやとあそびます

ママにはないですよ　たつやのはなしをするとママはおこります。
どうしてかな

きょうくさのうえであそんでるときにママにみつかりました。

たつやにあいたいといっていたのにママはそんなこはいないってお
こりました。

そしてなきました。　ぼくもなきました　たつやがかわいそうです
だからたつやのパパはどしてちがうひとをききました

たつやがけがをしているのはママのせいだをいいました

そのあとママはびょうきでばたとたおれたのでりょうくんのおば
さんに

たすけてもらいました。

ママ　はやくよくなってね

目が覚めたのは日が落ちて随分と経ってからでした。　連絡を受けた
夫は仕事を途中で切り上げて駆けつけてくれました。　横にはお隣の
美護さんの奥さんもいます。　数哉が呼びに行ってくれたみたいです。
他人行儀な天井と乾いた蛍光灯を見つめながら、私の体は過去に戻
ってしまいました。　我が子が他人の子に思えるほど。　母親である私
がどこかに飛んで行ってしまった感じ。

病状は心配するほどのものではないと、お医者さんから云われまし
た。　急性の貧血でしょう、疲れがたまっていたのではないのですか
と、聞かれたのですが、本当の事は云えません、適当に合づちを打
って話を合わせておきました。

私の意識を奪った原因は疲れなんかではありません。

私は見たのです、数歳が空き地で目に見えない誰かと遊んでいるのを。

最初はあの子がおかしくなってしまったと、そのことで気を失いそうになったのですが、それは私の間違いでした。

あの子は正しかった、そこに確かにいたのです、タツヤという子が。

あの子は泣きながら私にこう言ったのです。

「どうしてタツヤのパパは違う人なの？おとうとなんでしょ？」
そして

「タツヤがけがしているのはママのせいなんだよ」

1993年

こうなってしまった原因は間違いなく私の閉じ込めていた秘密にあります。

私は高校を卒業するとなけなしのお金をおばあちゃんから貰い、ある街で働き始めました。学校では疎外されてきた私は人に飢えてました。人とうまく話せない恐怖心もありましたが、私が貧乏であるのはあの田舎の中だけ、スーツを着たらみな同じ条件、という環境の中でその恐れは薄れていき、だんだんと楽しみへと変わっていききました。保険の外交という職種に惹かれたのは、よくいえば自己と正反対の人間への変身願望があったせい、悪くいえば過去の自分

を隠す人間像が欲しかったのでしょうか。とにかく誰も知らない土地で一人暮らしを始めた私は自分でも驚くほどすぐに彼氏が出来ました。彼によれば素朴な雰囲気が出たそうなのですがあの頃の私は洗練された女性になろうと必死になっていたために、単に服装や髪形の事でよく彼と揉めたのを覚えています。彼とは最初から最後までうまくいきませんでした。彼の求める女性像と私になりたい女性像とはあまりにギャップがあつたからなんです。とはいってもの彼とは3年間もお付き合いを続け、彼には情みたいなものが湧いていたのは事実です。だから最後に、あんな風に彼に抱かれたのも愛情ではなくただの情です。

彼との交際が情性で続く日々の中、私は今の夫に出会いました。あの頃、よく保険の勧誘に学校の職員室にお邪魔していたのですが、そこで夫に出会った時の感触を今でも覚えています。ああこの人だと、直感したことを忘れることが出来ません。イメージ通りというのでしょうか、私が求めるものがすべて彼の中にあつたのです。話してもないのにそんなことが分かるのかと言われそうですが実際その通りだったのだから仕方ありません。

簡単にいえば父親と正反対の人間です。石橋を3度じゃ飽き足らず、4度5度叩くような人。世間一般じゃそういった人間はつまらないとフェロモンを感じないそうですが、私にはそういったものは必要ありませんでした。

彼の職場を訪れる度にちょこちょこ話しかけ、次第に仲良くなつていきました。彼の人間性を再確認しつつも、彼からデートに誘うことはまずないだろうということも再認識していました。だから頃合いを見て彼の連絡先を聞き出そうとしていたのですが、思わぬ事態がおきたのです。

彼には婚約をしている若い女性教師がいたのです。しかも同じ職場に。そのことを教えてくれたのはその学校の校長を務める年配の女性教師でした。

「あなたには早めにお教えしたほうがよいと思ひまして。周りの先

生方もなんと申してよいか困っている様子ですし」

恥ずかしかった。今まで生きてきた人生で一番忘れたい出来事。どんなふうに映っていたのでしょうか？きつと周りを困惑させるほどに、はしゃいで見えたのでしょうか。かわいそうな女、そんな風に思われていたのかも知れません。彼はそんな素振りは一度だつて見せなかったのに。そこがあの人らしさといえはそうなんですが。彼があ頃私に対してどのような感情を持っていたのかは知る由もありません。しかし、あの時の私は彼の気持ちなんて二の次でした。ただ欲しかったのです。男性としてではなく、結婚相手として。

だから行動に出ました。それ以降、職員室を訪ねることのなかった私でしたが彼の連絡先を手に入れていた私は、休日天気の悪い日を狙つて彼を呼び出しました。一度でいいから会つてくださいと。彼が断わる決断力を持ちえていないことは先に話した通り。当然彼はやってきました。

その日は土砂降り。私の期待以上のシチュエーション。2時間も前に待ち合わせのお店の前に来た私は予定通りずぶ濡れ姿で立っていました。家を出るときには小雨がぱらぱらと舞い落ちていたのですが傘を手にすることはありませんでした。彼が2時間後に登場したところには私の体は冷え切っていました。次の日から3日間寝込んだぐらいに。哀れもない私の姿に彼は眼を丸くしましたがとにかく体を温めたいと私から彼を誘いました。こんな幼稚な作戦が通じるかどうか不安でしたが逆に分かりやすさがよかったのかもしれない。その時彼がなぜ私の企みにのつたかどうかは知りませんが、彼の中で何が起こったのかも私には分かりません。単に結婚前にちよつとした火遊びがしたかっただけなのか、そこに都合よく手軽な女が現れたと思ったのかは分かりませんがとにかく私の計算通りでした。避妊具を付けさせないことも考えましたが彼の性格を考えるとそこまではできませんでした。重い女は逆効果です。彼の誠実さがそうだった（変な）ところに出てくるのは容易に想像がつくこと。だから一度きりの女をその日は演じました。

一度きりで十分でした。彼の免疫には自分の犯した罪に耐えきれず抗体はなかったから。きっと自分を責めて彼女に打ち明けるだろうことは大方予想していたのです。それに彼が自分の口から打ち明ける必要もない、折を見て私が彼女に言うつもりでしたから。

結局自分から謝ることになった彼でしたが誠実さが売りの男の信頼は回復できなかったみたいです。その後、彼女と破局した彼を落とすのは簡単な作業でした。

寂しい男は女の体を求めるもの。男の経験が未熟な私でもそのことは本能で分かっていました。それから数歳を身ごもり今に至るまでの経緯は皆さんの予想どおりの展開です。

ただし、その間、いまでも私の中に染みついて落ちない最悪の出来事が起こりました。

話の最初に紹介した彼との縁は切れていませんでしたので、夫との交際が始まる頃、彼にはお別れを告げました。だからだと続いていた関係、簡単に処理できると思いついていたのですが、別れるとなると彼の態度は一変、そんなことは認めない、別れないでくれと執拗に食い下がってきたのです。お前とは結婚するつもりだったのか、一度も云ったこともない言葉を口にし始め、私がすきを見て、彼には内緒で部屋を引っ越した時もどうやって探し出したのか、再び私のアパートに現れ、ストーリーまがいの事をし始めたのです。最初はアパートの前に何をするでもなく何時間も立ち続ける程度の事でしたが、私の反応がないとみると玄関先で大声を出したり、ドアを激しく叩くと言った暴挙に出たのです。当時はストーリーカーなんて言葉すら存在せず、痴話喧嘩程度の扱いで警察も相手にはしてくれませんでした。当然彼の存在は夫には内緒にしていましたので相談することも出来ず、遠回しに一緒に住みたいみたいなことを洩らしたこともあったのですが、婚約者を振った上に（彼女の立場を考慮してなのか、はたまた自分の世間体を守るためなのかどうかは分かりませんが、とにかく彼は職場内ではそういうことにしていました）新しい女と同棲なんて教師として出来ないともっともらしいこ

とを云われたため、そのままその話題はないこととなったのです。しかたなくしばらくの間は我慢することにしました。時が経てば彼も諦めるだろうと楽観視していたのですが事態は段々と悪化していきました。

その日の彼の行動は深刻なものでした。2時間も玄関の前でわめき散らしていましたが一向に帰る気配を見せません。様子がいつもとは違ったのです。最悪な事態を予想せざる負えない状況でしたので仕方なく警察に通報しようかと考えていた時に彼は突然に大声で子供のように泣き出したのです。俺が悪かった、俺が悪かったと、許してくれと今さつきとはまるで別人のように。絶対に追い返すつもりだったのですが、彼の今までの行動は強がりだったんだと、つい同情してしまった私はとうとう玄関の扉を開けてしまいました。今思えばそこで気丈な態度を示せばよかったのですが、3年以上も一緒にいた男、情というものがあります、どうしてもほっておくことができませんでした。

扉を開けると彼はまるで母親にすぐる様にこう言いました。

「もう二度とここには来ない。お前の事も忘れる。だからもう一回抱かせてくれ。これで最後にするから」

なんて男でしょう。いや、男とはなんて呆れた生き物でしょう、そう脱力したのを覚えています。こんな時によくもまあそんなことを。

呆れる以外の言葉を持ち得なかった私は半ば開き直って彼を招き入れました。

これで最後なら仕方がない、これで終わりにしよう。

彼が暴力的な行為に出ることも覚悟していました。私の心は夫に支配されてしまったのでそんなことぐらい乗り切れると動じるつもりはありませんでした。が、彼は拍子抜けするほどに優しく丁寧でした。ああ、この人は本当に私の事を愛してくれているんだと感動すらしていました。

その後数週間たっても彼は約束どおり私の前に姿を現すことはあ

りませんでした。一安心していた私が自分の大きな過ちに気付いたのはそのすぐ後でした。そう、彼は私のおなかの中に彼の遺恨を植え付けていました。恐ろしい執念。彼の分身は私の心をズタズタにしていきました。夫との結婚以外の道は考えられなかった私には墮胎という選択肢しか残されていません。他の方はどうか知りませんが、私にとって自分の身に宿った子どもをおろすという行為は到底受け入れられることではありません。自分の将来のために子供を犠牲にする、その考えに私は自分を呪いました。自分を捨てた母親よりもっと酷いことを行う私を。

しばらく放心状態のまま仕事も手に付かなかった私でしたが、それでも私の決意が揺らぐことはありませんでした。何せ時間がありません、早くしないと手遅れになる。

結局自分の将来のために子供を犠牲にした私はもう後戻りは出来ませんでした。幸せになるしかなかったのです。

たつや 彼は私に恨みを云いに来たのでしょうか。

その血はまだ止まらないのでしょうか

10月3日

10月 3日

今日は2件隣の番さん宅の新居・転居祝いに行ってきました。

ご近所さんが増えるのは素敵なことなんですが、どうゆう御夫婦かが問題。

どうか素敵な夫婦でありますように。

あの事件の後、しばらくは数哉も元気を無くしてお外で遊ぶことが少なく

なりましたが、今ではもう、もと通りに戻って領君とお外によく出かけています。

たつやという少年のことはお互いに口にすることを避けています。私が倒れたのはたつやのことが原因ではないかと、小さいなりに感じていたのではないのでしょうか？

あれ以来、空き地で一人遊びをすることもなくなり、たつやの存在も感じません。

彼はもう、出てこないのでしょうか？

とにかく今はまたいつも通り幸せな家庭を築くことに集中しなくちゃ。

そのためには番さん夫婦を自分のテリトリーに入れなくてはいいわ。いわ。

この界限では戦国時代の風潮がまだ残っていて、新参者が現れたときには皆

あれやこれやといろんな手を尽くして、自分の味方に引き込もうと必死の作戦を

たててきます。どの時代も数の多い戦隊が有利なのです。

ちなみにこの一帯で力を振舞っているのは美護さんグループ。

すでに番さん宅のお庭で陣取っています。大きな日傘の下で。

自分からは挨拶には行かないわよ、とばかりに余裕の表情でクッキ―をかじっています。

私はいまだにどのグループにも入れていないので味方が欲しいところ。

なんとか仲良くなりたいたいのですが、あらゆるグループの手下が勧誘しようとはかりに

番さんの奥さんを取り巻いているのでなかなか近付けません。

お庭に置かれた小さなベンチに一人座り、数哉と領君のじゃれているのをぼんやりと

見つめていると、突然後ろから声をかけられました。

「どうもはじめまして。番と申します。ご挨拶まだでしたよね」

「あつ、はじめまして」

ジュースの入ったグラスを右手にもったまま頭を下げる自分の姿がみつともなく、

無礼に思えてグラスを置くところを探したのですがどこにも適当な場所がありません。

おろおろしている姿が可笑しかったのか、にっこりとほほ笑んで

「気にしないでください。寛いでくれたほうが私も嬉しいですよ」と優しく云ってくれました。

顔を真っ赤にしながらあらためてご主人の顔を確認してみました。

微笑んで丁度よく下がった目じりに浮かんだ2本のしわがとてもお似合いで

彼の内面を全て表現していると言っても過言ではない、と言いきれるほど、

優しさがにじみ出ています。そしてとにかく紳士的な雰囲気立ち姿からでも

確認出来る。普通はこのような男性には警戒心が湧くのですが、このご主人には

そんな私の小さなバリヤーは役にたちそうもありません。

「座りましょう」

番さんにすめられてベンチに再び座りなおした私は少し緊張しているのが分かります。

「今日はご主人はいらっしゃってないのですか」

「すいません。仕事がありました」

「日曜日にお仕事ですか。失礼ですけど」

「教師をやっています、小学校の」

「そうですか。立派なお仕事で」

いえいえと謙遜した私は顔がほころんでいるのを自覚してあわてて作り直します。

「ママ！」

私を見つけた数哉が駆け寄ってきます。私のひざに飛びついてきた息子の頭をなでていると後ろ斜めからなにか気配を感じました。

「かわいい息子さん」

番さんの奥さんです。

再びあわてて立ち上がった私は「ご挨拶が遅れまして」と頭をふかぶかと下げたのですが

そんな私には目もくれずにすつとしゃがみ込むと数哉にドーナツを差し出しています。

「僕いくつ？」

5サイ！と大きな声で答えた数哉はドーナツに夢中になっています。柔らかな視線でそんな様子を見つめる奥さんに、いまだほつとかれている

私はどうしたものかと「ちゃんとお礼をいいなさい」と数哉の頭をなで続けました。

その時、はっとしました。もしかして。

ご主人と二人きりで話をしていたことが、奥さんの癪に障ったのでは？

奥さんはずっと立ち上がると私の目をまっすぐに見つめて、にこっと笑いかけました。

自分でもわかるほど顔が引きつったままの笑顔を返すと両手で私の包んでは「よろしくね」と云ってくれました。

「ここはいろいろと大変なところみたいね」

ここ2、3時間の間に奥さんの周りでいろんなことが起きたのでしよう、

このご近所事情を理解した奥さんは困った顔で、けど楽しそうに話します。

私の膝の上に座った数哉の頭をゆっくりと撫でながら。

番さん夫婦にはお子さんがいないことは事情通の奥さん方からの情報ですでに

知っていました。奥様のお歳はどうみても50歳はいつてます。きつと今から

妊娠は難しいでしょう。そんな私の心の中を覗いたのでしょうか

「これからも坊ちゃんといっしょに遊びに来てくださる？」

と少し遠慮がちに尋ねた奥さんに旦那さんが口を挟みます。

「そうですよ。ぜひいらしてくださいよ」

「あなた、うちの夫のお気に入りになったみたいね」

いたずらっぽく笑う奥さんに、「なにをっ」と、どもったご主人は居心地悪そうにリビングへと消えていきました。

その所作がまるで高校生のように微笑ましく、しばらく奥さんとこれまた女子高生のように大きな声で笑いあっていました。

不思議そうに私の顔を見上げる数哉の視線のほかに、もうひとつ、痛いほどの

視線を感じました。

今となつては誰のものは確認しなくても分かります。

その視線の持ち主は組んだ足をゆっくりとほどくと取り巻きを押しのけながら

真つすぐにこちらに向かつてきます。

急に顔の表情を変えた私を不思議そうに覗きこむ奥さんを見無視するように

「随分と仲良くなつたみたいね。 たつたひとり手に入れたぐらいで盾突こうと

思わないことよ」

見当違いな嫌味を云い残すとそのまま颯爽と帰って行きました。

美護さんと私の顔を交互に見比べた番さんは大変そうねとばかりに私の背中をふたつ、ぽんぽんと叩いてくれました。

とりあえず、いいご近所さんがやってきたということで良しとしましょう。

12月24日

12月24日

今日はクリスマス。先週の日曜日に主人と数哉と三人でお庭の垣根に飾り付けたイルミネーションをリビングの中から眺めながら、主人の帰りを待っています。

今日も帰りが遅いそうです。冬休みに入った学生たちが街に繰り出して問題を起こすのは毎年のことだそうで、教員総出で巡回をするそうなのです。立派な仕事だと頭では分かっているながらも、今日ぐらいいは我が家においてほしいと、色とりどりの点滅する電球が余計に寂しさを助長します。

美護さんのお宅はわざわざ業者を呼んで飾りを取り付けていました。この辺りの住民は美護さん宅より派手にならない様に気を配りながら飾り付けをしていたみたい。

今はお隣さんの家の中から取り巻きの奥さん方のわざとらしい笑い声が漏れて我が家まで聞こえてきます。私はどうしても顔を出すことが出来ませんでした。

きつと明日の朝には嫌味を言われると分かっている。

私は小さいころ一度だけクラスの中で一番お金持ちと云われていた女の子が企画したクリスマスパーティーにお呼ばれたことがありました。貧乏の家庭に育った私にはパーティーなんて初めてのことで、即答で行くことを伝えたのですが、すぐ後に後悔したのを覚えています。なぜなら私には綺麗な洋服がなかった。きつとみんなおめかししてくることでしょう、私一人惨めな格好でその中にいることは耐えられないかもしれない。おまけにさらに私を悩ませたのは条

件として一つプレゼントを持っていくこと。

私は考えました。こうなったらおばあちゃんにおねだりするしかない。ただし、洋服とプレゼントの両方を買ってくれるはずはない。どっちを選ぶか。

その時、彼女が云っていた言葉を思い出しました。

「プレゼント交換の時はね、電気を消すの。みんなで輪になってプレゼントをグルグル回すんだよ。そうすれば誰のモノか分からないし。後で文句いってこ無しだからね」

そうだ。そんなにいいものを持っていかなくてもきつと大丈夫だ。そう思った私はおばあちゃんに洋服を買ってくれるようにおねだりしました。

しぶしぶでしたが、内職を手伝うことを条件に近くのスーパーでワンピースを買ってもらったのを今でも覚えています。

そしてプレゼントとして私が選んだのは、父が持って帰ってきた綺麗な紫色のルビーでした。もちろんそんな高価なものではない上に、加工前の小さな石でしたが、父はこれを私に渡す時にこう言いました。

「この石を握りしめて願い事を一日一回、一年間し続けたらきつと叶うよ」と。

毎晩、父の言葉を信じて、父が帰ってきますようにとお願い事をしていた大事な石でしたが、これ以外に適当なものはなく、おばあちゃんが取っておいた、出来るだけ綺麗な包装紙を引っ張り出してその石を入れた小さな箱を包みました。

その日の夜はとても楽しかったのを覚えています。食べ物といったら、はじめて口にするようなものばかり。おまけにクラスみんなは学校にいる時と違ってとても優しくかった。

これが毎日続けばいいのにと、私も別人のようにはいでいました。

家に帰り、私が貰ったプレゼントを開けてみるとぴかぴかに光った

新品の筆箱が入っていました。アニメのキャラクターがプリントされた、かわいいピンクの筆箱。

その夜は布団から何度も飛び出してその筆箱を眺めたものでした。寝てしまったら夢のように消えてしまうのを恐れるように。

そして次の日、それは現実となってしまうました。一夜の夢となっていました。

翌朝、さっそくその筆箱を持って学校に行ったところ、それに気付いたクラスの女の子たちが私の机の周りを取り囲んでは「いいなあ」「かわいい！」と羨ましがっていました。

昨日の夢がまだ続いているみたいで、いつも一人ぼっちで皆に囲まれてはしゃいだことのない私は幸せに浸っていたのですが、午後の体育の授業を終えて教室に戻って来た時のこと。それは起きました。

体操服に着替えて教室を出る前に、机の中に筆箱をきちんとしまつてから運動場に向かったのに、そのときの私の机の上には鉛筆と定規、消しゴムが無造作に散らばって置かれていたのです。そして昨日プレゼントで渡したはずの父から貰った紫色の石もそこにありました。

それを見たとき、どうゆうことが、すぐに見当が付きましたがどうしても認めたくなくて必死に机の中を探しました、あの綺麗な筆箱を。

どこを見ても見つからないと分かると、今度はお金持ちの女の子のところに駆け寄りました。

「私の筆箱知らない？きのうもらったモノなの」

「私のもってるけど。」

平然とそういうと机の中からその筆箱を取り出しました。

「かえして」

「これはあげない。あなたルール違反したから」

「どういうこと？」

「みんなプレゼント買ってきたのに、あなただけあんな汚い石ころ入れて。あれ、あなたのもでしょ？あたたしいじゃない。」

どうする事も出来ませんでした。その場で泣き崩れる私に彼女はこう言い放ちました。

「かわいそうだと思ったからさそつたのに。よぶんじゃなかった。ひきょうもの」

そのあとのことはあんまり覚えていません。

気が付いた時はその子の上に乗って、髪の毛を引っ張り上げていました。

きつと悔しかったのです。

筆箱をとられたこと。

彼女が金持ちであること。

父のくれたお土産を馬鹿にされたこと。

その大事なものをプレゼント欲しさに手放したこと。

それ以来、私の周りには、以前にもまして人が寄り付かなくなりました。

クリスマスになるたびに思い出します。おばあちゃんの料理を。

わたしのために奮発して料理を作ってくれたのに、ご飯にケチャップをかけただけのものだったり、ケーキの代わりにお団子が皿に乗っていたりと。

悲しくて「いらないっ」って文句を言って布団にくるまっていたこと。

いまでも後悔している。

本当におばあちゃん、ごめんね。

今こうして立派な家の中で、贅沢なご飯を食べることが出来るのもみんなみんな、おばあちゃんのおかげだから。ありがとう。

4月6日

4月6日

今日は旦那と子供を家に置いて旅行に来ました。

番さん夫婦と一緒に。

毎日の主婦業から解放されてとっても幸せ。

まあ、旅行といっても車で2時間ほど走った県内の温泉場なんですが、それでも何も考えなくていいってことはこんなに気持ちのいいことなんでしょうか。

今私の頭の中は空っぽ。体がほぐれて血行も良く、お顔がぽっぽ。風呂上がりのビールをあおりながら、マッサージチェアに揺られています。

「風呂上がりのビールは最高ですね」

あまりの気持ち良さに、うとうととしていた時、突然後ろから声をかけられ、びっくりして振り向けば番さんのご主人です。

「ええ。素敵なお風呂をいただきました」

ご主人の相変わらずさわやかな笑顔を直視できなくて自分の足元に視線を戻した時。

最悪です。

なんと、私のだらけてゆるんだ体は、がばっと大腿を開き、その上、浴衣をもばっくりとはだけていたのです。

あわてて裾を整えたのですが、時すでに遅し。

あまりの恥ずかしさにお顔がさらに真っ赤になったところ、

「いい血色になりましたね」

とご主人が云うものですから私は言葉を失いました。

「ほんと、湯上り美人とは奥さんみたいな人を云うんだろうなあ」

さらに顔があかまるのが自分でも感じられます。

なんか、独身時代に戻ったみたい。

「そんなあ、番さんも若々しくて……。おモテになるでしょう？」
きつとこの時の私のまなこは上目づかいであったことでしょう。

「いやいや、もうこの年ですから。お宅の旦那さんが羨ましい。
奥さんを一人占め出来るんだから。私にも分けてほしいですよ」
全然構いません。どれほどそう云いたかったか。

「恥ずかしい話、最近は全然家に帰ってこなくて。仕事で忙しいのは解るんですが。男の人はそういう時あんまり口うるさく言わないほうがいいですよね？」

お酒に酔ったせいとか、少し甘えている感じ。

「んーん……。そうですね、ホントに仕事ならいいんですが……。」
そう云った後に、「いや、失礼」と謝るのですが、私も本当はそのことが心配なのですとつい打ち明けてしまいました。

打ち明けたというより、そのことで相談に乗って欲しくて誘導したといったほうがいいかも。

やっぱり甘えているのかなあ。

実は1カ月程前になるでしょうか。

昼ご飯を数哉と二人で食べてリビングで昼ドラに見入っていた時のこと。

キッチンのカウンターに置いた電話が鳴りだしたので、クッキーをかじりながら受話器を取ったところ、すぐにぷつんと切れました。
変なの、と呟きながら再びソファに座りなおすと、また鳴り出します。

「もう！いいところなのに」愚痴を言う私を数哉は笑って見ています。

「もしもし」

少しいらついた感情が伝わったのかしら？

相手が無言なのを気にして

「もしもし。どちらさまでしょうか？」

と改まって丁寧言いなおしたのですが、それでも応答はありません。

それから何度か声をかけても返事がないので仕方なく受話器を置いたのです。

その日はそれ以来電話は掛けてこなかったのですがそんなことがあったのは忘れていたのですが、

2日後、まったく同じ時間帯にその電話は掛ってきました。

初めのうちは電話の不具合か故障かなにかだと思い、すぐに受話器を置いていたのですが、3、4回目ぐらいになると、わざとなんでしょう、聞きとれるほどの相手の息遣いがつたわってきました。

その息遣いを耳元で聴いて、今までの不具合ではなかったんだと思った瞬間、恐怖で悪寒が走ったのを覚えています。

そしてその時、最初に頭をよぎったのは『たつや』でした。

もしかして、あの子はまだいる？

まだそこにいて私に復讐しようとしていると。

それからというものの、その無言電話がかかってくる度に私は謝り続けました。

ごめんね。私を許してと。どうすることもできなかったんだと。

毎回、毎回。謝り続けました。

謝るとその時は電話が切れるのですが、しばらくするとまた掛かってきます。

私一人ではどうする事も出来ずにノイローゼになりそうだったので、たまらずに夫に相談したのです。

しかしです。それがきっかけでした。
別の疑惑が頭の中で蠢いたのは。

もしかしたらたつやではないのかも と。

「ねえ、最近ね、無言電話がかかってくるの」
できるだけさっと、軽い感じでにそう云ってみたのですが、ほんの一瞬、夫の瞳が揺らいだのを確かに見たのです。

この人、動揺している。もしかして…。

その2、3日後、再び無言電話がかかってきた時、私は思いきって聞いたのです。 あなたは誰 と。

あの夫の動揺がなかったら、きつと聞けなかったでしょう。

「お母さん、僕だよ、たつやだよ」なんて言われた日には私は生きていけませんから。

「あなた、正志さんの知り合い？」

そう云うと相手は受話器を置きました。

それ以来その電話は掛かってきません。

この旅行に逃げてきた大きな理由はそこにありました。

「まあ、無責任な発言かもしれませんが、可能性はありますね」
番さんのご主人は残念そうに云ってくれました。

その直後、奥さんが温泉から上がってきたのでそこで話は終わったのですが、少し体が軽くなったような気がします。
話を聞いてくれただけでも良かったです。

4月6日（後書き）

しばらくお休み中。。。。

つづきを待っていてくれる人がいるかどうか分かんないけど、
もしいてくれるならがんばって書いてみます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324m/>

金魚鉢に咲いた、咲いた。

2011年11月15日11時38分発行